

狼塚古墳群

古墳時代後半から終末期の古墳群

狼塚古墳群は、駅家町法成寺北側の標高85mから144mの山間に位置しています。現在、古墳時代後半（6世紀後半）から終末期（7世紀前半）までの横穴式石室が、5か所知られています。これらの古墳は、いずれも早くから開墾によって墳丘が崩され、石室も開口してしまいました。1号古墳は未調査ですが、2号から5号までの4基は、工業団地造成に伴って1997年度に発掘調査が行われました。

2号古墳は、神辺・駅家平野を一望できる標高144mの丘陵頂部のやや南側に造られています。墳丘は直径

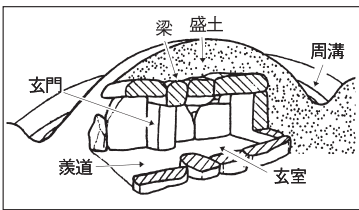


2号古墳全景(南面から)

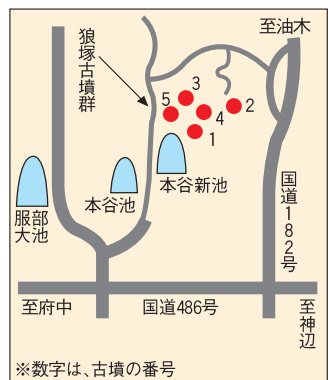
12mの円墳で、周囲に幅2〜2.8m・深さ40cmの溝が巡っていました。盛土は流失していましたが、石室は完全な形で残っていました。

この石室は、内側の長さが約5.4m、幅1.5m、高さ1.5mで、南東に開口していました。石材は、表面を平たく加工した1〜2m四方の大きなもので、側壁が4〜5枚、天井石が4枚の石で組み立てられています。遺物は、石室内から須恵器の破片4点、鉄製馬具の断片1点、滑石製管玉26点などが出土しており、遺物や石室の形から古墳時代終末期ごろに造られたことが考えられます。

この古墳の特徴は、遺体を埋葬する玄室と、通路となる羨道との間に石材を張り出して玄門と梁が設けられています。



狼塚2号古墳構造図



ることです。同じような造りをした古墳は、周辺では大佐山白塚古墳（新市町）や大坊古墳（神辺町）など、石室の全長が10m前後もある巨大な横穴式石室にも見られることから、これらの古墳と同様の技術を持った人々によって造られたことが考えられます。

3号から5号の古墳は、いずれも大きな自然石を積み上げた横穴式石室です。石室の様子から古墳時代後半に造られたものと考えられます。このうち、5号古墳では、出土した須恵器から8世紀ごろまで相次いで埋葬が行われていたことが明らかになっています。

なお、1号古墳は現在、粟塚古墳の丘に移築されており、開口した横穴式石室を見学することができます。

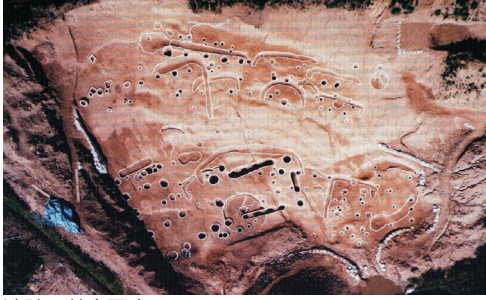
（1998年3月号に掲載）

加茂丁遺跡

掘立柱の建物など検出

加茂丁遺跡は、神辺平野中央部の低い丘陵南斜面に営まれた集落遺跡です。JR万能倉駅の北500mにある県立自彊高校から道を隔てた北側に立地します。

この地が開発されることとなり、事前調査を行ったところ、弥生時代後期から奈良時代ごろまでの遺跡が存在することが確認されました。このため、1996年の夏から秋にかけて、発掘



遺跡の航空写真

調査を実施しました。その結果、竪穴式住居跡10棟、掘立柱（礎石を用いず、柱を直接土中に埋め込んだもの）の建物跡5棟を検出しました。

直径3.5m前後の円形の竪穴式住居跡には床面中央部に炉穴があり、数本の柱が立てられていたことが分かりました。また、一辺が4mくらいの角が丸くなった方形の住居跡では、片隅にカマドが造り付けられているものもありました。これら竪穴式住居跡にはすべて床面の周囲に深さ10cm、幅15cmほどの溝が巡っていました。出土した土器の破片から、円形の住居跡は弥生時代後期から古墳時代前期に、方形のもの



旧自彊高校から遺跡地を望む

は古墳時代後期に使われたものと考えられます。

掘立柱建物のうち1棟は、東西約7m、南北約4.5mあり、南・北・東面は、角の柱以外は溝を掘って柱を立てる珍しい布掘工法で造られていました。特別な用途に使われた建物だったのでしよう。この西側にも並んで掘立柱で建てられた東西4m以上、南北約3.5mの建物2棟がありました。これらの建物は、古墳時代後期のものと考えられます。

この地は、背後を小高い丘に囲まれ南に面しています。冬の厳しい北風からも守られ、付近には湧き水も出ており、生活するには絶好の場所だったものと思われず。

また、この遺跡の性格を考えるには、奈良時代に編集された『日本書紀』の「婀娜国」についての記事や、この場所が古代からの品治郡と安那（古くはアナ）郡の境に近いことなども考慮する必要があります。

なお、現地は今、霊園として整備され、遺構は見る事ができません。

（1998年4月号に掲載）

粟塚古墳

山間にある4基の古墳

粟塚古墳群は、駅家町法成寺の山間に位置する4基の古墳で、3月号で紹介した狼塚古墳群の東の丘陵に造られています。

1号・2号古墳は、粟塚池の近くにある横穴式石室の古墳ですが、2号古墳の石室はすでになくなっています。

1号古墳は墳丘が流失し、天井石の1枚が石室内に崩落しているものの、長さ5.8m、幅1.4m、高さ1.8mの無袖式の横穴式石室が残っています。奥壁は1枚石で、側壁は大小の石材が3段ほど積み上げられ、天井石には3mを超える大きな板石が使用されています。



4号古墳全景
標高144mの高所に造られています

3号古墳は、2号古墳の上方にあり、墳丘のみが確認されていました。1995年に開発が計画されたため、試掘調査が行われました。その結果、径21mの円墳で、埋葬施設は粘土槨であることが分かりました。粘土槨とは、遺体を納めた木棺を厚い粘土で覆い保護する施設のことです。福山地方ではあまり例がなく貴重であるため、保存されることになりました。

4号古墳は、3号古墳からさらに上方の標高144.4mという最高所に造られています。ここからの眺望はきわめてよく、眼下に駅家、神辺平野が広がり、遠くは瀬戸内海から四国山脈まで望むことができます。

この古墳は、開発に伴い1997年に発掘調査が行われました。径14mの円墳で横穴式石室でしたが、石材はほ



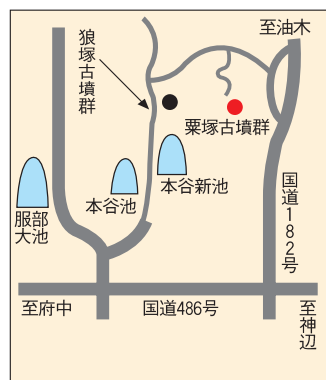
4号古墳発掘風景
石室内から須恵器の坏などが検出されました

とんど取り去られ、奥壁と両側壁の基底部だけが残っていました。残存規模は長さ3.2m、幅1.4m、高さ1.1mで、石室の床面には川原石が一面に敷き詰められていました。

石室内からは須恵器の坏や高坏、銅製耳環、鉄鏃などが出土し、人骨片も多数検出されています。出土した須恵器から、この古墳は6世紀後半に造られ、その後も8世紀前半ころまで追葬もしくは祭りが行われていたことが分かりました。

近辺は、当古墳群をはじめ、古墳が密集する地域で、古墳の変遷や歴史背景を知る手がかりが、たくさん眠っています。

(1998年6月号に掲載)



山野発電所 福山市唯一の水力市発電所

福山市の北端、岡山県との県境に位置する山野町に、福山市唯一の水力発電所があります。

この発電所は「福山電気株式会社山野発電所」といい、山野町の中央を流れる小田川沿いに昭和初年から1931年（昭和6年）にかけて建設されました。

建物は鉄骨板貼造で、平面は25m×12mと南北に長く、北側一部が2階建てになっています。南側の吹き抜け1階部分には黒光りする2台の発電機が地響きをたてて稼働しています。



発電所全景

時間に1、250kWで、年間約900万kWの電気を生産しています。福山市の家庭1軒あたり月平均消費電力量が270kWといえますから、山野発電所の年間生産量で約2、800軒の家庭電気をまかなうことができます。3、300Vで発電されたこの電気は、トランスで6、600Vに昇圧して駅家町の変電所に送られ、そこから工場や家庭に供給されています。

2階は配電室になっていて、電気量や電圧の測定、機械の調子などが常に2人体制で監視されています。

では、発電機はどうやって動いているのでしょうか。発電所の東の山の斜面に長い鉄管が見えます。この鉄管は直径が上部で1、055m、下部で0、89m、長さが333m。総落差が189mあり、この中を流れ落ちる水力

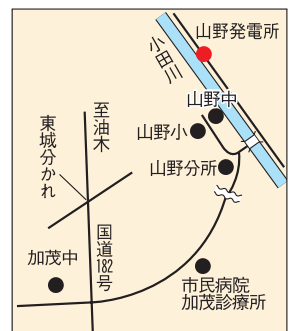


建物の1階にある発電機

は1cmあたり19kgの圧力となり、この大きな力で発電機を回しているのです。その水は、神石郡境に貯水ダムが造られ、そこから水路が掘削され、鉄管上部の水槽まで引き込まれています。水路の総延長は6.5kmあり、そのうち4.7kmはトンネルになっています。

発電所、水路、貯水ダム、これらの総工費は当時のお金で約112万5千円。延べ人数34万人、延べ日数1、095日という大工事でした。また、現在のような機械や道具のない時代のことですから、大変な難工事であったことがうかがえます。

苦難を乗り越え建設された発電所は、80年近くたった今も、休むことなく毎日電気を供給し続けています。



（1998年10月号に掲載）

山野八幡神社本殿 意匠に優れた神社建築

山野小学校のある平地の西側は、高い台地となり、その台地に立つと北方にうつそうとした森が見えます。この鎮守の森が山野町の八幡神社です。

山野八幡神社は、すさのみや相宮八幡神社ともいわれ、暦応元年(1338年)に京都石清水八幡宮から分霊を迎えたと伝えられています。

石鳥居をくぐると、100mを超える参道が西に延び、その両側には一抱え以上もある老杉が立ち並び、神秘さをかもしだしています。参道から、さらに石段を上がると本殿にたどり着きます。



入母屋造の本殿

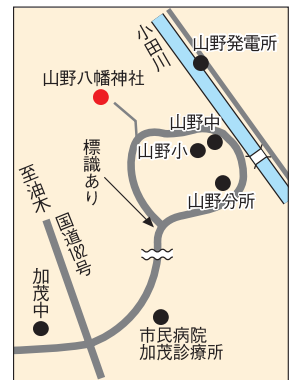
現存する本殿の建立年代は明らかではありませんが、様式上、17世紀前期のものと考えられています。板壁、縁板、高欄などが取り替えられ、当初は柿葺であったらしい屋根も銅板葺に改められています。その他の保存状態は極めて良好です。

本殿は桁行3間、梁間2間の身舎に、1間の向拝が付属する形式で、屋根は入母屋造、向拝には唐破風を設けています。

身舎は丸柱で、正面中央間には格子戸型の扉が釣られ(薮戸)、内部は板扉で内陣と外陣に区画されています。建築部材の彫刻は非常に優れ、特に木鼻は渦巻模様の周囲に大きな若葉を付けた独創的なものです。組物と組物の中間に置かれた墓股かみまたも形が良く、動物



身舎の木鼻とその上の組物。
組物の右に墓股



などの透かし彫刻が施されています。向拝は角柱で、虹梁を架け、象の丸彫りの木鼻を出して組物を置き、手挟たてあしには、籠のように内部を透かし、牡丹模様を立体的に彫り上げた精巧な籠彫技法が用いられています。

このように、木鼻や手挟など本殿細部の意匠は特に優れ、保存状態も良好で、江戸時代初期の入母屋造本殿の好例となっています。

また神社周辺には、正徳4年(1714年)の石灯笼の竿、正徳5年(1715年)の手水鉢、万延元年(1860年)の狛犬などの石造物もあります。

毎年10月10日の秋祭には山野神楽と山野神儀も奉納されていますので、古い建築と伝統芸能の鑑賞に訪れてみてはいかがでしょうか。

(1999年5月号に掲載)

山野七曲り 民話の残る峠道

山野町から福山方面へは、今でこそトンネルを利用すれば楽に行くことができますが、かつては、標高300m前後の険しい峠越えでした。

福山への道は、山野町の中央を流れる小田川の支流、大谷川沿いを南にさかのぼる道が幹線道でした。しばらくは谷あい道が続き、途中の広間には、笠木方面との分かれに道しるべが建てられています。現在の旧トンネルの北出口付近にある片屋橋あたりから山中に入り、そこから峠までは幾度も曲折する狭くて急な道で、「七曲り」と



◀広間の
道しるべ



▶仁平地蔵

呼ばれていました。峠からは加茂町方面や神辺町方面に道が分かれ、それぞれ福山に通じていました。

明治半ばごろまでは、七曲りの道を、徒歩や馬で往来し、山野で生産された木材、こんにやく、木炭などが運ばれていったということです。

この道にはいくつかの民話が残っています。山野から七曲りに至るまでに、樹木に覆われ昼間でも薄暗い「ツブセ越し」と呼ばれる山裾道がありました。福山から帰ってくる夕暮れ時に、ここでいつもキツネにたまされるところです。通行時の疲労や不安な気持ちをも物語っているのかもしれませんが。

また、峠の南下に仁平と呼ばれる働き者が住み、加茂や福山に出かけ、稼いだお金は土中に蓄えていたという話もあります。この話を裏付けるかのよ



新県道・新七曲トンネル(右)と旧県道



うに、県道の工事中に屋敷跡といわれる付近から、数回にわたって多量の銭貨が見つかっています。1986年も県道斜面で、寛永通宝などの一文銭約1万枚が偶然発見され、話題を呼びました。

人の往来がほとんどなくなった七曲りに、ひっそりと1体の石地藏が建っています。「明和三年」(1766年)銘があり、「仁平地蔵」として信仰されています。その傍らには、石仏や牛供養塔もまつられ、往来の無事が祈られていた様子がうかがえます。

1956年には峠の下方に七曲トンネルが完成。1998年には、さらに下方の谷部に新七曲トンネルが開通したため、七曲りを通行する人はなくなり、今では草木に覆われて民話に語られる往来風景はなくなりました。

(2000年3月号に掲載)

大谷池と灌漑用水 加茂川流域を潤した大池



大谷池
手前が余水吐、右側は放水路口と土手

大谷池は、加茂川支流にあたる四川川の最上流に位置する灌漑用水池です。四川川の中流では現在、治水ダムの建設が進んでいますが、これをさらにさかのぼると谷間に大きな堤が見えてきます。周辺は深い溪谷に囲まれていたため、満水時には澄んだ水面に四季の樹木が映り、神秘的な雰囲気を作り出しています。

池の堤防は長さ130.6m、高さ30.3mで、貯水量891,000t、満水面積約8.3haにおよぶ大規模な溜

池です。

『大谷池小史』によれば、この池が築造される以前は、七社・姫谷・細田の各池が加茂川下流の灌漑用水池でしたが、水量が十分でなく、干ばつには度々水不足にみまわれていました。

このため、1924年（大正13年）の大干ばつをきっかけに、新たに灌漑用水池設置の機運が起きました。数度にわたる地元の熱心な陳情が実って、1926年（大正15年）に着工の運びとなりました。時の経済恐慌や難工事による建設費の増加などに悩まされましたが、5年の歳月を費やして完成しました。その後、堤や用水施設の老朽化と1985年（昭和60年）の豪雨による被害のため、1987年（昭和62年）から1991年（平成3年）にかけて、大規模な改修工事が行われ、現在に至っています。

池に蓄えられた水は、四川川を下り



賀茂神社に祭られた「石のとよ」



加茂川と合流して流れています。河川の途中には多くの井手が設けられ、幹線用水路を通じて下加茂、上加茂、道上、下岩成、森脇、中津原の約307haの耕地を潤しています。

用水路は、途中で自然河川と交差して流れている部分がある所もあり、そこには鉄管の水路（樋）やトンネルが使われています。このうち百谷川越えには、かつて長さ約4.8m・幅60cm・厚さ40cmの石柱に、幅40cm・深さ20cmの溝を切った「石のとよ」と呼ばれた長大な石樋が掛けられていました。昭和初期の水路改修で、川底を通す暗渠水路に取り換えられましたが、使われていた石樋は、現在記念碑として賀茂神社境内に祭られており、用水に対する地域の人々の感謝の気持ちを表しています。

（2000年6月号に掲載）

服部大池 備南平野を潤す大池

駅家から服部の谷にさしかかると、目の前に巨大な堤と取水塔が見えてきます。

服部大池は、今から356年前の江戸時代初期に造られた灌漑用の溜池です。降水量の少ない瀬戸内地方に位置する福山藩では、灌漑用水を確保するために河川からの取水だけでなく、多くの溜池が必要でした。



「福山志料」によると、この池は寛永20年（1643年）に起工し、正保2年（1645年）に完成したと記されています。完成時の面積は、10万8,000坪、周囲25町20間、堤長108間で、現在の約2倍の面積がありました。池の水は、安那・品治・深津郡の計20か村、総面積350町1反27歩の耕地を潤していました。

当時この池は、備後で最大規模の溜池で、福山藩全域の240か村から人々を動員して工事が行われました。しかし、工事は難航し、このため「人柱お糸」の伝説さえ生まれるほどで、



大池の取水塔



今もその悲しい話が伝えられています。現在は、上流から土砂が流入し、池の面積が狭くなっていますが、堤長172m、堤高17.9m、総貯水量65万m³、満水面積18haで、灌漑面積240haの農業用溜池として利用されています。また、池の堤には多数の桜やばらが植えられており、春には花見の一大名所ともなっています。

(2001年2月号に掲載)

掛迫城跡

往時の知恵を感じる城跡

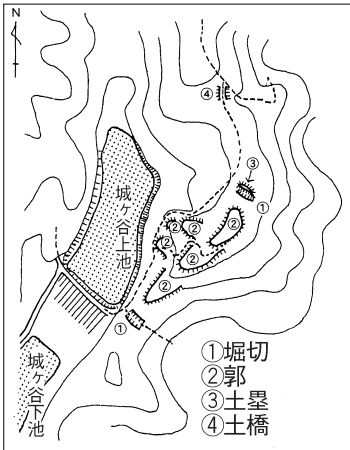
掛迫城跡は、市内駅家町法成寺にあり、江戸時代に記された書物には桂迫城とも書かれています。この城には戦国時代に、宮治部太輔勝國（勝岡とも書かれている）が城主として居城していたと伝えられ、1500年代の中頃、毛利方の攻撃により落城したようです。この城跡へは、JR福塩線駅家駅から北東の福山北産業団地に向かって進



福山北産業団地から見た掛迫城跡
(最も高い所が主郭)

むと、約2kmで「本谷池」の下側に着きます。ここから300mほど右方向に進めば「城ヶ谷上池、下池」があり、上池の土手東側つけ根が掛迫城南端の堀切と考えられています。ここから山道を登ると、平坦面が階段状に見られます。これらが郭と呼ばれるもので、最高所の最も広い所が主郭で、約40m×15mの広さがあります。その北東10m余りの所には堀切が設けられ、その外側は土塁状に高く造られています。さらに約80m北東には、尾根の両側を切り落とし尾根道を細くした土橋状のものがあり、北東方面からの侵入を防いでいます。小さいながら城の形状をよく残し、当時の人の知恵を感じることがができます。

ここまで上ってくると、産業団地が



目前にあり、この団地の東側に接して『粟塚古墳の丘』が造られています。団地開発により発掘調査された後、移築された古墳などが見られます。

(2001年8月号に掲載)



戸屋ヶ丸城跡

中世から戦国時代の城跡

戸屋ヶ丸城跡は、山野町中心部の北西に位置し、標高190mで平野部から90mの丘陵上に築かれています。南北に長い丘陵の周囲は断崖絶壁である上に、小田川が西、北、東の三方の裾を取り囲み自然の堀となり、南側の深い谷筋とあわせてまさに天然の要害となっています。



戸屋ヶ丸城跡遠景(中央の丘陵が城跡)

が地頭として山野村に入り、ここに築城したという説があります。また江戸時代の『西備名区』には、中世から戦国時代にかけて宮氏、世良氏、江草氏などが居城していたと記されています。山頂部を削平して造られた主郭は、南北約120m、東西約80mとかなりの広さがあり、建物や防御施設が構築されていたことが想像されます。備中との国境方面が見渡せる南東側と、北方に通じる北側の尾根筋には、監視のためいくつかの郭が造られ、さらに唯一尾根続きとなっている南西側には、外部からの侵入を防ぐため堀切が設けられています。

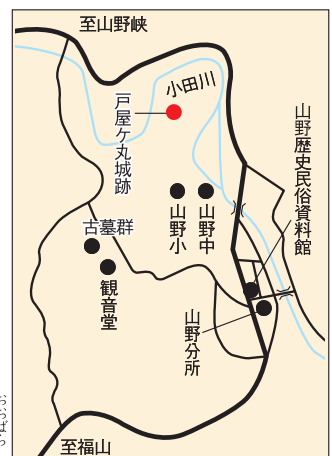
また、この城から見通せる位置で、南東に800m離れた場所に「城山」と呼ばれる小丘陵があり、見張りのための出城であったことが考えられます。



戸屋ヶ丸城跡の碑

城跡のまわりには、現在も「大原」「殿川内」「上市」「下市」など中世の領主や集落に関する地名が残り、点状する五輪塔群や法篋印塔群と合わせて、城を取り巻く中世の村の様子をうかがうことができます。

(2001年10月号に掲載)



正戸山城跡

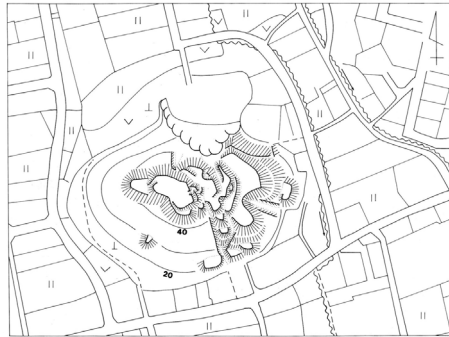
神辺平野を一望する要衝

正戸山城は、御幸町上岩成の北東部に位置し、標高49m、平野部からの高さは34mです。この山城には、「小藤山、正渡山、勝戸山、勝渡山」など多くの名前が当ててあり、本拠を置いた武将としては、南北朝時代の岩松頼宥や、戦国時代の宮氏らがいます。

『備後古城記』には、「此城南往還三方沼也」と記されています。この城の南には旧山陽道があり、三方を沼に囲まれた平城であったと読み取れます。



北から見た城跡



正戸山城跡略図

山頂部を削平して造られた主郭は、一辺が約20mの郭です。その東側には石垣を使用した虎口が開いており、今もその石垣を見ることが出来ます。

東西の斜面には後世の改変があると思われませんが、東側は階段状になった小郭と考えられる平坦面がいくつか残っています。南には堀底道が造られ、ここが登城路だったと思われます。東にも斜面に道が造られています。

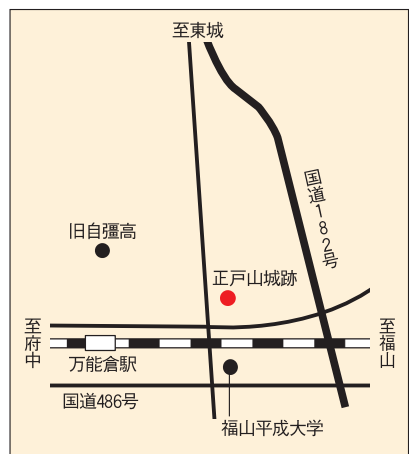
北の下端には、馬場があったと考えられますが、今ではその痕跡はほとんど残っていません。また、近くには井戸もあり、ここに城主の居館があったと推測され、現在、正戸山に登る東か

らの道は、居館から本丸に登る道だと思われま

すが、頂上の北東部は一段高くなっていますが、これは神社を建てたためのもので、南側に見られる道沿いの石垣も後世のものと考えられます。

この山城の頂上からは神辺平野を一望に見渡せ、要衝であったことがうかがうことができます。

(2001年12月号に掲載)



泉山城跡

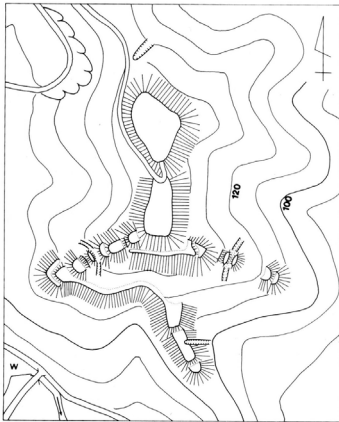
毛利氏と宮氏の攻防の跡

駅家町の服部川をよかのぼとすると、南北に細長い谷が二手に分かれますが、その突き当たりに泉山城跡があります。標高154m、比高はわずか80mですが、谷全体を一望できる絶好の場所に築かれています。頂上まで車道が通じていますが、冬場なら、南側から土居荒神社を通過して山道を登ると、郭のいくつかを確認することができます。



発掘調査で見つかった遺構

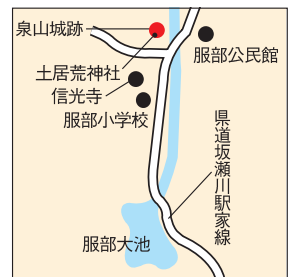
山頂には南北に2つの大きな郭があり、一段高い北側が主郭です。その北には、尾根を切るように深い堀切が見られます。南側第2郭の南端から東・南・西の3方向に延びる尾根上に郭群や堀切を設けています。また、城跡の南麓には「土居」と呼ばれる地名が残り、居館が存在した可能性もあります。泉山城は、鎌倉時代の築城と伝えられていますが、応永15年(1408年)ごろの『山内首藤家文書』には、宮次郎右衛門尉氏兼が服部の地を領していたと記され、室町時代には宮氏の居城だったことがわかります。しかし、天文3年(1534年)には毛利氏に攻められて落城し、城主の宮元清は討死したとも出雲の尼子氏を頼ったともいわれます。城跡の南にある信光寺は、



泉山城跡略図

元清の兄の信光が菩提寺として建立した寺と伝えられています。宮氏の後に入った杉原氏も、戦国時代の末(16世紀末)には毛利氏によって領地を没収され、ついには廃城となったようです。城跡の2km南には、市の史跡「むくやま棕山城跡」があるなど、近辺には多くの山城が点在し、中世の服部や雨木一帯が要害の地であったことを示しています。

(2002年3月号に掲載)



天神山城跡

京都下鴨社領を望む要害

天神山城跡は、国道182号の加茂町中野交差点から約1km北側の山頂にある中世の山城跡です。

加茂町上加茂から芦原の一带は、京都下鴨神社の荘園として平安時代から室町時代まで存続した勝田庄が置かれた地です。賀茂神社がまつられているほか、高尾山など京都との関連をうかがわせる地名も残っています。また、城跡の南麓には平安時代の唐草文軒平

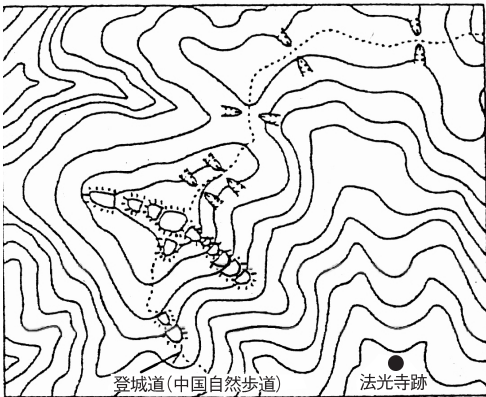


南からみた天神山城跡

瓦を出土した法光寺跡があります。

室町時代には、備後南部に進出した宮氏と、安芸の毛利氏がこの地で勢力を争い、宮氏最後の砦となった志川滝山城を天文20年（1551年）に毛利氏が攻めた際には、この一帯が毛利氏の本陣になったと伝えられています。

城跡は、標高188m、比高150mの丘陵頂部に築かれています。山頂からは、南に神辺平野を一望でき、東に加茂谷を見下ろすことができます。遺構は、山頂を中心に東西と南側の尾根線上に10数箇所の郭が配置されています。北側は神石高原から派生する細尾根に続いており、数箇所の堅堀と土



天神山城跡略図

橋、堀切で防備が固められています。

文献には明応（1492～1501年）年中に大内氏の家臣であった内藤氏が居城し、天文（1532～1555年）年中に毛利氏に従った渡辺氏が居城したことが伝えられています。

城へ登る道は急な斜面が続きますが、中国自然歩道として整備されています。道沿いには城跡のほか永久地奥古墳群があり、歴史の探訪と健脚を試すには手ごころなコースです。

（2002年7月号に掲載）



龍頭峽

自然の神秘

海拔500～600mの吉備高原が広がる山野町付近は、小田川の本流と支流の原谷川などの浸食によって深さ200～300mの峡谷がつくられ、その蛇行も著しく、見ごたえのある景観を呈しています。

1954年に県名勝に指定された龍頭峽は、田原から西へ原谷川を上るとまもなく右側に峡谷入り口があらわれ、そこから北へ約1.4km続きます。この峡谷一帯は、千枚岩質の粘板岩からなる急峻なV字谷で、入り口付近の川底では、畳状に広がる粘板岩を見ることが



龍頭の滝

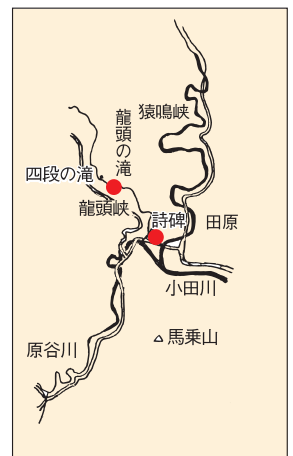
でき、さらに渓谷沿いには四段の滝などの小瀑布、急流、淵など美しい景観が連続しています。

圧巻は、龍頭の滝です。豊富な水が一気に滝つぼまで落下し、冷気と瀑声、が渓谷をふるわすさまは実に壯観です。龍が口に玉をくわえて火を噴く姿に似ているといわれ、夏には滝をのぼるウナギを見ることができそうです。また、冬の凍りついた滝も見事です。

龍頭峽の景観に一層の光彩を添えるのは天然林で、勢いのある常緑広葉樹



阪谷朗廬の詩碑



は原始林の様相を呈しています。動物相も豊かで、鳥の鳴き声がこだまし、しばしば野猿も出没します。

この深山幽谷の世界と滝の雄大さを詠んだ、江戸時代末期の漢学者、阪谷朗廬の詩碑が峡谷の入り口に建っています。

秋には猿鳴峽にも足をのばし、紅葉狩りを楽しむのもいいでしょう。

(2002年10月号に掲載)

古代山陽道①

当時の二級国道

奈良時代から平安時代中頃まで、都と大陸への玄関口であった九州大宰府を結ぶ官道が整備されました。この道は大陸からの外交使節の通り道であるため、所々に設けられた駅家（えきか・うまや）には、瓦葺・白壁の駅館が建てられていたと記録に残されています。この官道の一部が市北部を横切っていました。正確な道路跡は確



戸手駅北の峠道

認されていませんが、現在の県道「下御領新市線」あたりと考えられています。今回と次回は、推定の古道を辿り周辺の遺跡などを紹介します。

府中方面からの旅人は、JR戸手駅北で県道から別れ、山あいの峠を越え駅家町へ入ります。この峠の南側から近田八幡神社の山にかけては中世の山城「法光寺山城」であったと考えられています。北側の山裾には、江戸時代の書物『福山志料』に、名水がわく井戸として「国造川」と記載されている泉があります。

この北東約500mには、古墳時代



水草が茂る「国造川」



後期にこの地域を治めた首長の墓である「二子塚古墳」もあるため、この近くに国造（くにのみやつこ）の居所があったのかもしれませんが、この古墳は、600年前後に造られた全長68mの、備南では最大の前方後円墳です。周囲には一部空堀も残っており、巨石を用いた横穴式石室がありますが、危険ですから入らないでください。

※国造：古墳時代に大和政権に任命された地方の支配者

（2002年12月号に掲載）

